世常
仏法

# 渡世外持法義

三

共五

遠B
652
3

帝國圖書館藏
連門
號652
卷3

# 渡世身持談義　三之巻目録

第一　身代堅地の根本し人々に換の上策を

明治三十六年九月十一日購求

拳合栄肇和尚法徒貢の魔法を弘めて欲人と盜賊徒

世間ハ

身代堅地の根本し人々に換の上策

偽殘酷の報也まゝ二物三之輝き宮と呼ぶ人中邪と世人作名付栄い花紅と云て勿論人中

ゆえ盜賊よりおそるゝと禁制と

第二

性の生かせる色墨で染て思ふ如く万人達

仕形い

江戸の表五百五十年以前迄一切の
如く廓より出て色付る事本
国土意皆成色のみと役如大
和尚のふ門あらしい

第三

色よい金ほしい欲しい未来の頂嫁狂ひ

仕形い

小家の笑よ大家の妬びと不知
方振い神なれた恋して我富の
祈ごろよれ来と云

浮世所持論義三之実

一 別代四地の横屋も今い横の上

りゐまつの郭巨はうりはどつぶん孝行はたらくとも貧く
貧金の釜のかりあいなるとき。富まつにても苦あり。貧
賤ふてし楽こあり。一切の人間意ゐ名誉を願ひ。卑
を減亡と古例を教とあらず。俗る動弁より。栄耀乃
ゆくえよりゆゆすづうる利とする。仕仏の職を勤ゐる
ごとく。大欲みりわく家を失ひ。貧しひ。貧れ月といふ行り。
古稀より小富いつとりにより。大富い天よりとあれば。貴
をうとやうとはそれくの働さいてをつとる事でうし。
若より拵よ追つく貧金なりといむりり。月に意ごゐる
仕仏の高いてい。貧りの金とゐよいすりけがさしい。

釈代ら十人合いゆるとさらる。横笛の高いまぐら　こひたがらるるとも
わ高美いぬとうてもわれぐでつらひあらるる合。ほうぞうあもうあと。
今こ新田の仲るくらう。時とわるるに今とと行ぜの三位減よとてぐひ。
いよくごろもけのるのこんぐけて。位演と一人て位ぜ位のえメをすれば。
ひ中に世実日いりけるるて。ぜてるの毎月づ巳てつるの西ゆるぬい
元程の位居わるとる尻の三男てうてぞるぐらに眼てけて位後の
位者い位ケの浦。山の今で陸よつけて行子の中ぬこ手い宮に這毎
してやらけとえて位の法合。高いの亭こ世よみの若とたそうや。
位で測て堪るぐくぞみぐと新月にてとてずるくと知い三ゆる者
ぐ位のをすぐこ知てもるこ中に。ぞ三毎の位来上人の世ぞれ法の法
ぐとけて。位もぬぐらりけい月のるとわるとるを位ぐ。今ら
のう大ぐらるきい付とやらけて。を後釈の代ら仕後さる。若の横

屋とかまるけてうんと。ぞ位に三ろ。位後の横こ知ける毎ら。百毎に今を
ら間てを付と。今ら毎と中花の横笛と。ゆらこそゆんと。上ら別
を者新くおて。位後こ行横の弁ら百毎の今をら間てゆる者。位後
ぐこて三毎ぐきけのこ。ぐら。ぞこ俗毎をうれば。古新の本
法こ立ら。毎の日ぐて位ぐ。て宮の若強るのこれ方ら。ぐこに
ぞて三新の大ぞ五ら某ら。古新の横ぐ並のこと。横笛人ぬげて
肝と法ー。強こ宮ハ古毎位四代ら。天物の今和と宮つら。ねいれ
天物ぐこ毎ぐるぐ。眼紙と分にそぐ。同しこるぐ毎とつめて
人てぬれば。上花と物ぐきぬ。今の宮と出て。毎月の上後に後ぐる
りのい。後後毎の社仲。峯今ぐ月。栄墓和ぐこぐら称し。ぬ一の
加毎ぐよ四の二れ衣とぞこ。文後の百八の後和とつまぐら。ぞ馬の月も
こぐるこき眼つきけて。宮月。後ぐと毎ぐ月の方よいこ二ぐる毎ぐ上百九上人

と宣して神主の家よりけ。蘇の角の四粒の種をと
たのもの。おのれの金銭の弱をうづくこ。ねがはくは七坊の中者をつ
まて。親しく先祖をとづら。粒をとりて面にこ。蘇をしりて。
さいづく無でば。栄華和るのいるべ。拙せいのふるうせりるにあそ。山
西海の尊をくそのをとあるとくせ。男のうづのつ。高ずるを
すあるはのれを。舟しろめ。彩をあざのあざしろをとそこ。天
物ぶのり。邪法くに入。彼奥。鬼の春。家とせんと。海貝をさしこ。足
そるのよ。ふ。こ。考んきうづの村。恵むすこ。ゆ。彩の金をはくる。院の
命。彼とつのりんとそ。我くが。邪法の宝つよ。伝でめゆる。人に。彩を
そゆうづおく。ふ。上に。金。法と。打せ。隣人とめて。部面の。宝。情をは。終
家。己の。力と。知に。通。力とひて。下ゆ。めそ。内天。のりろ。ふ。人。ふい
意づ。ん。ま。ひそ。ひと。住。ふ。し。ー。ま。人の。部。ふ。ろ。ざ。ろと。堀。んと。そ。我。は。よ。彩。こ。

知。縄。ま。て。ま。ど。て。ま。ど。て。ね。入。下。情。身。金。と。ひ。ら。自。滅。と。う。ら。足。さ。ら。自。
和。ま。あ。ざ。ら。に。伝。ら。と。ま。ら。ー。ま。ら。ー。ま。ら。ー。及。ど。で。大。敬。の。個。ー。ら。そ。ひ。と。
つ。と。我。ら。の。春。家。ら。ら。ー。ら。ー。ら。ー

江戸の
姓
伝


清室

かうあ拾末の二字を書むりの上向てぺつぬ弁とうつて一かゝ十まで四
ゝ五人るのいけをくはぐゝ三ゝ葉をめぐりとゝ我はい大欲非ゝを え
して人のわと只ゝ五ゝと乞ゝ三ゝ五ゝ五ゝ五

そこにてうち方使いの屋どもが一同ようぶつき寄りて内緒ものが
仕あく、恐怖極屋さまの
小石川高ひときりひ大ぐ方なるに入これた幼少の侍
猪頁七郎まず正月移びの家門飾さんとはふれざるゆへにそこ
狂歌に換をして出れたる人門みも立ぐ寒ともいまぐ百姓
とい方を横に所け面さうぞをはなしていかぶやうの男にかるうち
おいなりと伴の金をまぶとろ入く立命ふ肝の八系怪し
てずとこうろおもひ彩ゆくいざ同乗仕ふとをはま
後ろ。ゆ枝して物金先が侯合のうちのあ男ぶうひとく
ゆうど。彼百姓とらあけしてて一向一ゑのよ横屋ってひ〜横の布ぎ
四ひうう布四花の男代とうしも猪頁るけうらざしゆぞし
人いんぐ明りにも一み後頁ってもたんぐ出屋ぎうるこ屋の

ろうそまもしのい我く合ってるうそわう怪奥ひぐ人うち〜去
は。年ってし止めるのかうい。れうるべしく

（二）

情の手が妹ろ里を訪て四る女命の万人傳
横別宮の傾国と徒分ちるのれ乃位の上方ふ。花おぶ花る花ふ花
月して。宮主の神主。一廊れ女命たとあるそ上ふるい拝上和
女命たぐれを立る一流の陳ふいのぬ人若日面仏は仰みのひ
るひてがうのやうれ市方と法うしい沿第ひ神社とあるのかく
立れ横某拝よつまびくうに出てわうぴ巻るといく年月をかぞく
月れが面八月十四日ぐ五百五百ふ年にわう。年屋にあう法ふたうう
巻に野高ってこケはとけぐうぱぐ御くうこ所のうに立るせの
ううれ人はうこふるは伝ってぱオにうう巻ゆるるぱうい社仰に月宮
の市鈴ってなぐれを汲で今日ひとうてて法人ょ屋ひうれ猪様の衣

[illegible]と名て[illegible]ようの[illegible]
[illegible]石[illegible]千[illegible]
の里ハ今[illegible]
れ移の印よ[illegible]
今さ[illegible]
つとめの[illegible]
をわ[illegible]
そ[illegible]
[illegible]の反故[illegible]
[illegible]
[illegible]大坂[illegible]
[illegible]世をわ[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

沼とるげうらの漁よりうたてあるの間にて。あるの金沼海のるを。
傾国の想ありさる海のあるに行けば。ちづくしあり。逗留して姑のつれ
と住らるゝ中に姑来て人ゐ居上人ゐつるゝと破て笑ひて
大にくよび代雖さびなくゝろ〳〵と金沼まき拾らるゝあさ高は
と姑来の宗百代をあこひ。雲龍不奥のやうてん坊号が上
昭無尊の西殿ゐ。ろきとつ去安京わの花楽をきつゝて
揚代を捧てあとくけてゝろゆゝか。金春よしの中云の屋とふ
るゝて云常の花色ゐとるゝを海く西方にあゐ。高はとて
ちんとすゝ象。後色ゝやいたん。ぐろ紛て彼あ侍と問答して。
一句しあげさるを脱衣して毋は越さとと。和代義、役侍と
云て日と云てはつゐゝそひゐゝ。ゐくに隅〳〵隈〳〵の
云の伝来ゐ実付。万一問答は負給て。拾よの和高代ゐあさまと

あゝて姑来すゝるゝ根と達ましのけんと。分おゝて流ゐちに拾ゐ。
流ゐ南日に如くれば。揚列傾国に利ゐゐゐ代。ゐ多乃用と
云ゐあ上人鳴合の老二人ゐ門松昊ハ文ゐの乃中ゆゐふ上に云て
来ゐ代あれば流ゐ来ちの塩沢中堂ゐの松蔵上人那ゐのみ彩ゐ伏
見十町目の賜ゐ来むばゐゐの後ゐて待木町と云ゐ。一天ゐめて永
代義のは後の塩ゐつゐゐ姑来上人ゐ海上人とゐ。ゐ衣
の霜坊達ゐ一列ゐ垂ゐて。ゐ方負ゐとゐ。ゐゐとのんで肘ゐゐ
てのは間ゐゐひゐゐ。ゐ代来ゐの拾ゐ。ゐゐ和高ゐ舌ゐゐ
ゐていゐく。ゐゐゐゐゐゐ。ゐゐゐゐゐゐ。ゐゐゐゐゐゐ。
ゐゐゐゐゐゐ

ろくぬきの家に住まし本の人もれ内うるをくなてこうてこうぞ人中者
海の子業和尚のまんぞうの法華の経を毎日十年の月日のうちをこの。
内蓮の内よりかづられ出一代菜の中に妙寂と云女房をつくれ
で往の海棠。大悲の方便のまことくいこのえちらくい江口の
君くはしじ。色とう精化の歌くはゆ人奇瑞をあらはし。
とる利益ぜ三悪よりして深山堂にてこのうれんに絶世の川竹の
まひろぐ。面くい一廓をかまへて。楽と高人。奥女日に
堂にて大都の門をあまさ名をとくぞをく雑多月切出世者ぞ
風呂屋。白石紅石六兵衛家のおぢやしく問屋とすハ。伊やらう
と云様と花の五郎の契閣まゆくき子比丘尼い仏者のなにれば。
妙蓮長者花ぞ。色のこひ恋のうるさい中きくと姫
ぞ。一枚まきに男のなくきうこ切髪切剃髪よい用ふこと。

神仏を拝の行ぶ世くうに女ぞと伝ひ女さ
拝女。実ときき安くゆしぞけいと旋風いあらあ。ご秘密と色
里と狂ぞ和歌猫のおくくゆるる。釈仁をもあきゆいお恵のうを
してあさ月でいふひとくがけしぬなでもれいくて。我ぞ身のを
分別いかして出さうをあい恋でなくて。色のうを都とすぞ。その
釈くい木の陰ぐすれ出れ。男女さいあひて。おろの恋う
ふくすれてもせ。今釈仁とよばれて。ちさいらくさ歌とちあそ
ないうけいをいぐうひとおを法とく人。万人を一人。恋にうで弟代
分数する人いない。のをんそ拝女ぐうひい。浮世のさう。歯業の妨と
ろくそう色。ろい恋は法華ぞ。祖師はいの君をて。法をつけ
らくぞひなを五百五十の。ちの追善と称りく四天ちいくしを
れさずていうぐれと云る一流の花をうふえぐと。さあ追善い

ゑみく。始末上人ゑていく。我くいけい木の股くゝ出ざるとのふ実るゆお
う〜本の股うもこのうかもしすぎどゝ母の若うぐさみかさうう。母
ぎうくは十月の若芽とうけてはしれ出さ我子としいめ法方
人は女のたと御するふいわゝ男女のたい法陽わとくのひて面ゆさ
まうゝ孫とともひる拍子。万世のけずやとそ中く伝法わるまうう。
まぬ和合のたうしていゝ孫もうく。若后ゝるい加編。天花万和
ともいなきめゝうて上方の聖祥。ゝ天切ゆ面ともくゝやんうう。婦
いゝ七つのゝ法にわう。男始ようゝうぐいさ法ゝ孝性ゝ面ゝくいゝ法ゝ
産ざれい出。ゝ孫ゝ面れいうう。婦孔ゝれい出。一族とゝうくいゝ。
婦子ゝうけまい出。面子とおゝうぐせいゝ。ゝ子ゝ法ゝ面れい出。
とゝ子ゝ出ゝ孫ゝ面ゝ法ゝ中ゝ法ゝ法ゝ法

ちゃうと
ゆるれ
ちゃうしんろ
ちゃうく
ちゃうく
ちゃうく

きうするの心ぼそくていさましきこゝろもいろるものよ。色おびと掴ふものいはゞ秋未
しいろいはいの様んで来し仕。今はのろいすのとい帯びゆうゞ毒つり帯び
ゆうの合点うてい。お服いろらうぶ別るにいろいすの紗布でい

(三) 色ろい今い帯び始末者の頃嫁狂し　おさやら居らの

中学生の扶職上人すゝ為て同て云ゞそうゝしろいはよい帯びゝ出ゞ。
つゝしゆゝに泥飛わうとい。湯ゝらいつゝよ女掲屋の左衣ゝ上ゝまゝさ
来いゝゝまゝいゞ人ゆゝすい今はのろいすのとい帯びゆうゞちゞふたゝ色のば
ゝうゝこのゝろいはの帯びゆゝうと伝てきゝさゞでゝつきゝと様ゞたゝ新
ゝて安ゝはゝふゝしゝそゝはこゝろゝて来ゝはつゝよゆゝいゝるんゞでゝゝふゝがの
とゝゝゝら知ゝて打ゝゝゝ始末上人言ていゝく。ゆゝゞど効ゝたゝゞろゝい
はけいゝゝいはゝ行ゝ安ゝゝの色ゝい実ゝて帯ゝんゞゝ学一家業とゝるゝに
つゝゝゝ。今ゝゝゝけゝてのゝゝはゝ来ゞいゝ帯びゝよゝ出ゞゝ仕ゞゝ身ゝこゝ有

ゆゝふ帯びゆゝいゝゝゝ。起体ゝゝゝゝゝゝゝ今はのろいすのとい名前は
ゝゝゝゝゝ年のゝゝゝゝゝゝゝ高ゝのゝゝゝゝゝゝゝて色のゝよゝかゝゝゝゝ。ゝゝ髪
のゝゝゝゝ振袖の腰ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

人にも挽うけ、モ身も清潔すゝまぞ。秋はなどのあいはあい紙のゆう
今あぐいるくめぐにつひ拵るに、わず。高ひるに自然の仕合よ。さひ
のあに利はとゝるあはゝ入い茶方の粗ゝ、ぐるとゝ行さ時。写の自ぐるて
それくに形ゝ、ぐうぴくうの物るるんぐそ。月は蓄るうれぐるて茶
のゝ行ゝ細のゝ見れて。手ゝ、しのせておうぐ、てにゝひのお行お
貴間のてゝ。えいなうね行ぐゝうゝ。冥かのゝれにち、ゝ百に茶来
一外法てつうぐ。ぴ行天ゝ行ゝて来ゝ月ぐ。ぴ三ゝ。ゝくゝゝ。ゝてゝ
たゝ神茶月てゝ。ゝうゝ。ゝん合一代のゝにゝいゝるれぐ。ゝいわて
ゝひゝ。ゝうゝ。ゝ百ゝ百色のゝまぐゝのゝはゝて。ずゝぐゝつゝの
るゝ行ゝて。ゝん。ゝ百ゝ。ゝけて。所ぐゝゝのゝ七ゝゝうゝて。ゝ。ゝ命ゝ。ゝに
ぐうゝぐゝ行て。ぐゝひゝ。ゝのゝて。ゝけて。ゝ。ゝるゝ色ゝる
て。ゝうゝぐ。ゝいゝひゝぐゝ。ゝ。ゝどゝゝゝ。ゝ。ゝ。

ちゝとねべ地蔵でゝる紙の小ゝるひゝゝてゝるぐゝみ。家ゝゝゆゝゝゝ
四代ゞゞゞゝゝゝ。菓子ゝゝ。ゝゝにめる南蛮菓子。ゝゝて十文の四じゝと
打ぬて土産ゝ紙ゝ包で庫ゝ。ゝゝ一日楽んでくゝ。ゝゝ代り紙
ねゝゝゝ紀て元禄ゝ。ゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝ

なに仕様のすで拵をぞ学いける風のまがいとり八反げのお織に七
百枚の大紙拵の代まを紙はまを貝入の二つ重箱に詰て三ヶ月の若
可ぐ与ねこのとおりきすハ九月暴のおくけ絵ごきくのるる紙屋新
織の結ひ中わとの細紙のざるか。物屋蔵の細社けやくにつて。
肩をかるる大編笠に菊屋よのいてでれけてゆくんぐうか代のあとこい
掘場様の大神よ。名ちや町の京寺。扇つぐのこんぱこーろさげのお
こ面つきうんよ。面世様の絵用る去よ。あるるおと色せ。絵さを
逆くにゆくせて去たよ名紙の左紙拵。紙でるよいおろせの絵さ丘
れとも獲しこ四にてれ那ん紙と稲つて紙おげや、八ての宮瀬る拵
び。若くよりゆとのれ茶屋くナ茶屋いていうねるぐるおの世
第のすい金ぬにて。宮へゆうそもくるるのこ紙ぐけて。紙拵の
紙付おの衣裳のすい市拵ふ。て大実。三月の紙山神して屋る

よくろ。おげやの屋のそろひの分と若けて。仕人拵て四合せ紙和
つるひぞ。母に毛毛とよ。母しる侍そ。い男ぐろとこいく
らい月つさすれい母こくて。紙若でいるまいぬ拵めくと仕るくて男
のかでれ。結ふ豆の彩入させ。さきみがきいろてのそ。ぐさ何の屋蔵と
ひつじさいの月のそこの巳屋。色友年と彼里の踊るのこにて。身法のせい
くおるとちびる屋のゆこにくにて。ぐ分の人を拵を踊る人のれにを
わ。こく所人い紙よりゆづるのお業とこげ。こ紙くこの彩ぬ扇と
ゆ。んるく。こ家性よ。物局こ。ゆるこ。せて世るとひすに浪。浮世様よ
ぬて。ぐさこそ月の家ぐし。に母屋ぐるひいすものこ。紙ぐるのる
いぬ。ぐかるいいぬ。ぐに紙てゆ。ぐとぐ。こ拵る侯紙の色里へ一寸紙
ぬ。いこ。ぐぬぐ。こ。ぐ。こ。ぐとたくこて返答せ。れぬ

浮世草子　好色五人女　三之巻